

第5回 JLPP 翻訳コンクール 独語部門講評

翻訳家、ドイツ文学者、東京大学名誉教授
池田信雄

第5回 JLPP 翻訳コンクールドイツ語部門は応募者が45名、本審査へ進んだ候補者が14名と予想をはるかに上回る盛況だった。2020年はドイツ語圏で村田沙耶香の『地球星人』と川上未映子の『夏物語』が翻訳され、大きな話題となった喜ばしい年でもあった。日本文学の新展開が予感されるなか、ドイツ語翻訳者の分厚い層が形成されることを願いつつ審査に当たらせてもらった。

今回の課題作は、小説部門が伊藤比呂美の「みんなのしっと」、野坂昭如の「東京小説 家庭篇」、評論・エッセイ部門が田辺聖子の「ヒロインの名前」、谷川俊太郎の三篇のミニエッセイ「思いつめる 教育について 前提として」だった。とつとつとした語り口の谷川のエッセイ以外は、どれも語り口こそ違え、延々と繰り広げられる話芸のオンパレードであり、随所で待ち受ける親不知のような行文の難関難所を挑戦者たちが果たしてうまく切り抜けられるか、はらはらどきどきの連続だろうと予想された。一見平易そうな谷川のエッセイも、ドイツ風の強靱な論理に従って論が粛々と運ばれるかというところとそうでなく、うっかり言葉の文目を見落とそうものならとんでもない迷路へひきずりこまれかねない危うさに満ちている。ことほどさようにくせ者ぞろいの課題作なので若い翻訳家志望者たちの食いつき具合を心配していたのだが、45名が応募したことからして、彼らはみなこの難題に尻込みするどころか、果敢に挑んだことが分かる。

翻訳とは、原作のテキストを翻訳者の言葉でトレースする作業だ。ただし製図台の上では行えない。原作のテキストは生きていて動くから、翻訳者はその動きに合わせて、自分の言葉という身体で相手の動きを出来る限り忠実に再現してゆく。みごとなパドドゥが一貫されてはじめて翻訳は成功する。舞納めて残るのは原作が姿を消した跡の翻訳言語の舞の軌跡であり、これが理想的な翻訳作品なのだ。

原作の言葉にみなぎる気を訳者の言葉がどう受け止め自律した形姿へ立ち上げていっているか、その気合と達成度を見るのが私たち審査員の仕事である。ときとして訳者の言葉が原作の言葉の強さに弾き飛ばされてしまうケースがあるが、どこまでついて行けてどことどこで振り落とされたかが自覚できると自分の翻訳言語のしなやかさを伸ばす絶好のチャンスとなる。ぜひこの経験をもとに精進していただきたい。

最優秀賞のロビン・ヴァイヒャートさんは伊藤比呂美の作品の後半に少し誤りがあったものの、谷川のエッセイの訳は安定していて両方とも読みやすく、将

来が楽しみな翻訳家の誕生に立ち会えた感がある。

優秀賞のジャネット・クラウスさんは野坂の小説と田辺のエッセイを選んだが、野坂の訳に少々の難点が認められた。同じく優秀賞の柳田ネンシさんは伊藤の小説と田辺のエッセイだったが、こちらは伊藤の訳が傑出していたのに比べ田辺の訳にはそれほどの評点は付けられなかった。しかしお二人とも今後翻訳家として立つ素質は十分と感じられた。